

中国出土資料學會會報

2024年7月6日 第78号

〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

東京大学東洋文化研究所 小寺研究室内 中国出土資料学会（事務局）

Tel : 03-5841-5843 e-mail : office@shutsudo.jp

<http://www.shutsudo.jp/>

◆目次◆

2023年度第2回大会（総80回）報告.....	1
特別寄稿：2年間の会長職を終えて	
下田 誠（東京学芸大学）.....	2
学会彙報.....	6

《2023年度第2回大会（総80回）報告》：2023年12月9日（土）オンライン開催

（Ⅰ）中国古代の女性身分についての一考察——「偏妻」の分析をめぐって——

多田 麻希子（日本学術振興会特別研究員PD（東京大学東洋文化研究所））

漢初の律である張家山漢簡『二年律令』に「偏妻」とよばれる妻がみえ、その解釈をめぐって様々な議論が展開されてきた。ただ「偏妻」は嫡妻と対比される存在であるとの共通理解はあるものの、その居住形態などの実態についてはいまだ定まった見解が提出されていない。これを「同居」という報告者が新たに解釈した出土秦律・漢律にみえる法律用語に基づいて考察することで、「偏妻」の実態の一部を明らかにすることができると思われる。

さらに漢初の『二年律令』において様々な妻の名称が出現したのに対して、秦代の律（睡虎地秦簡・嶽麓秦簡）においては、現在のところ「偏妻」などの名称がみえない。また文帝期の律（張家山336号墓出土漢簡）では「偏妻」は「下妻」に置き換わっている。妻の名称にみえるこうした時代的变化を手掛かりにして、前漢時代に至り女性間に法的身分の序列化が進行したのではないかとの課題を提出した。

（Ⅱ）馬王堆帛書『周易』繫辭篇の道器論と太極論

李 承律（慶北大学校哲学科副教授）

統一秦から前漢初期に儒家は、『周易』を利用して儒家初の二つの世界観を樹立する。一つは「道器論」であり、もう一つは「太極論」である。それが含まれている現存最古の文献が、周知のように馬王堆帛書『周易』繫辭篇である。道器論は、形而上の「道」と形而下の「器」の二部世界観からなっている。また、それは、①道の領域、②「乾坤・変・通・象」という『周易』の領域、③「器」という万物の領域、④人間の領域、という四部構造となっている。人間の領域は、さらに「法」という社会・政治の領域と「神」という呪術・信仰の領域に細分される。①が形而上の世界であり、②・③・④が形而下の世界であることは言うまでもない。ここで問題は、道器論において形而上の道の世界と形而下の器の世界は、存在論的な主宰と被宰の関係に設定されているが、四部構造の内部において『周易』・万物・人間といった各領域の関係は、明確な形で設定されておらず破片化している点である。太極論は、四部構造の内、形而下の世界において破片化し無関係のように見える各領域の諸関係を明確な形で繋げつつ、合理と非合理の世界を統合するために、儒家によって新しく考案されたものと考えられる。

(Ⅲ) “帥禹之緒” 還是 “帥禹之堵”？ —— 相關問題之會通

陳劍（復旦大學出土文獻與古文字研究中心教授、
“古文字與中華文明傳承發展工程” 協同攻關創新平臺）

近年新刊曾侯寶編鐘（或稱孺加/加孺編鐘）“帥禹之堵”句，研究者讀法有“帥禹之緒”與“帥禹之堵”之不同。其間分歧反映出，大家對早期古漢語中較為特別的“{堵}”詞之義尚嫌認識得不夠明晰透徹。

綜合所有或尚未被聯繫起來的材料看，上古漢語中本存在一個與牆堵之“堵”無關之“{堵}”詞，其義之準確理解應為，“某人乃至‘某（些）物’所居處/佔有/包含/活動的特定區域、範圍”（對於君王而言亦可說即其所統治之疆域、領土），引申而指“某人/物之特定‘位處’”。其用字不一，現所見相關諸辭計有：曾侯寶編鐘“帥禹之堵”，叔弓鐘“處禹之堵（堵）”，清華簡《五紀》“成天之堵”，秦公簋“在帝之𡗗（堵）”，曾侯腆編鐘“代（式）武之堵”；麥方尊“出𡗗（堵）”，鄂侯馭方鼎“在𡗗（堵）”；漢代多見的“安堵”、“案署”等。諸例皆可會通而得統一解釋。

《特別寄稿》

2年間の会長職を終えて

下田 誠（東京学芸大学）

会員の皆様、中国学関係の皆様には、日頃より中国出土資料学会の運営にご協力を賜り、誠にありがとうございます。このたび2年の任期を終えるにあたり、原稿執筆の依頼をいただき、僭越ながら、活動の様子を簡単に紹介したいと考えています。

私が会長職を拝命したのは、2022年度・23年度の2年間であり、なお、新型コロナウイルス感染症防止の取り組みが続く期間でした。コロナ関係でもっとも尽力されたのは、私の前に会長をつとめられた宮本徹理事（現会計委員会・委員長）であり、私は、基本的に宮本元会長の方向性を継承したにすぎません。すでに遠い昔のように感じられますが、Zoom等のオンライン会議システムの導入時には、さまざまな下準備と「格闘」がありました。私の仕事というのは、オンライン会議の定着のなかで、対面の会を少しずつ復活させていくことでした。おそらくライブ型のオンライン会議と対面式会議の効果や成果に関する比較研究は存在することでしょう。しかし、私たち一人ひとりの研究者が実感として、オンラインの限界、対面の意義を考え始めた時期に、私は任務を引き受けたものと認識しています。具体的には、2022年度第2回大会（7月9日）は完全オンライン（Zoom）によるものでしたが、第2回大会（12月3日）は早稲田大学において、2023年第1回大会（7月1日）は東北学院大学において、対面とオンライン・ライブ型を併用するハイブリッド型（ハイフレックス方式）で開催することができました。これは、会場校となり、大会委員長でもある柿沼陽平理事のご協力（12月）、そして同じく会場校の下倉渉教授（東北学院大学）のご支援によるものです。東京以外での地方開催としては、本会では、2016年12月に岩手大学において第2回大会を開催して以来のことでした。このように、本会は少しずつ2019年度以前の活気を取り戻しつつあります。任期最後の2023年度第2回大会（12月9日）は発表者の参加形態を考慮し、完全オンラインとしました。しかし、アフターコロナの活動というのは、このような柔軟な対応が可能になったということの意味していると、私は前向きに受け止めています。

以上、形式の話に終始しましたが、この4回の大会でご発表いただいた皆様は、思想史・古文字学・考古学・歴史学等の最前線で活躍される若手・中堅・ベテランの研究者です。各種活動が沈滞化している時期にも、本会が学術の灯を消さず、質の高い大会を開催し、機関誌を刊行し続けてきたことは、大きな社会貢献であったものと考えています。

このほかもう1点、成果面に言及すると、翻訳出版関係です。これはもともと就任当初には何も予定されていなかったことであり、2022年11月中旬に突然、東方書店の担当者より連絡をいただきました。ご連絡によれば、本会が2014年6月に刊行した『地下からの贈り物—新出土資料が語るいにしへの中国』を北京の商務印書館より大陸版・簡体字により翻訳出版したいとのこと（現在の版は2016年1月の初版第2刷）。その後の激動は省略しますが、47名の執筆者全員に委任状の提出にご協力いただき、現在にいたっています。出土資料研究は日進月歩の分野であり、執筆者の皆様におかれましては、さまざまな想いを抱えておられることと推察しています。一方、中国出土資料の魅力を実際的に伝える本書が国際発信されることの意義も疑いないことです。ご賛同いただいた執筆者の皆様へ感謝申し上げる次第です。本書は、刊行委員会の委員長であった原宗子元会長、小澤正人元会長（現理事、将来計画出版委員会・委員長）のイニシアチブによるものであり、当時の会長であった名和敏光理事のご支持によるものです。現在なお翻訳作業等が進行中であ

りますが、受け継いできたバトンを实らせるべく、本件の責は果たしたいと考えています。なお、こうした実務を陰ながら支えてくださっているのは、元会長の小寺敦理事（庶務委員会・委員長）であり、庶務委員会の柏倉優一幹事です。深謝申し上げます。

いくつかやり残した課題についてふれておくと、海外会員の会費納入方法の改善と本会機関誌の電子化関連です。いずれも大事な課題で、他学会の方式等も収集し、前に進める必要があります。本年3月をもって私は会長職を退きましたが、4月より慣例により副会長となり、森和新会長を支えていきます。上記の課題は、いずれも新規会員の獲得や本会の財務運営にも直結するものであり、鋭意取り組む所存です。

最後に、本会は、発表を引き受けてくださった方、会員の皆様のご支持、各理事・委員会のご尽力により、成り立っています。引き続き、本会の発展にご支援・ご協力の程、よろしく願い申し上げます。

本文脱稿後、本会創設メンバーであり元会長の池澤優先生の訃報に接しました。本会理事を引退されてまもなくのことで、残念でなりません。心よりご冥福をお祈りいたします。

《学会彙報》

○大会委員会より

(1) 2023年度第2回大会（総80回）が、2023年12月9日（土）にオンライン形式で開催されました。

○会報委員会より

(1) 会報（年2回発行）は2020年度から学会ウェブサイトにおいて公開することといたしました。

なお、会報発行の際にはこれをメールでお知らせするなどしております。事務局にメールアドレスをご登録いただいていない会員の皆さまは、ご登録のほどよろしくお願いいたします。

(2) 2012年7月21日に開催された臨時総会において、「中国出土資料學會著作権規定」が承認され、即日施行されました。本会報については第46号（2011年3月発行）から同規定が適用されます。対象となる各号掲載の著作物の利用に際しては、同規定の定めるところにより処理されることとなりますので、希望される方は、HP掲載の利用申請書をダウンロードして事務局まで申請してください。

(3) 年2回の大会開催時に合わせて発行される本『中国出土資料學會會報』は、新しい学術情報をできるだけ早く提供することを目的として編集されています。

会員各位におかれましては有益な情報を入手されたら、是非とも会報委員会に原稿の提供をお願い致します。中国における最新の学界動向、遺跡発掘の様様、学会参加記、新刊紹介など、広く提供するに足ると感じられた情報であれば何でも結構です。

原稿は随時受け付けておりますので、事務局宛電子メールの添付ファイルとしてお送りくださ

い。会報の内容を一層充実させるため、会員諸氏のふるってのご寄稿をお待ちしております。

○機関誌委員会より

(1) 機関誌『中国出土資料研究』の投稿は紙媒体・郵送による方式を廃止し、下記の通り行います。ふるってご寄稿願います。

- ・ご投稿の際は、メール（宛先：office@shutsudo.jp）で玉稿の電子データをお送り下さい。郵便で紙媒体等をお送りになっても受理いたしかねます。
- ・ファイル形式は、WORD（～.docx または、～.doc）形式です。外字は画像データ貼付でお願いいたします。
- ・文書のレイアウトは、WORD 横書きの標準的なものでお願いいたします。レイアウトを機関誌のそれに合わせないで下さい。
- ・図表が含まれるなど、WORD ファイルのみでは玉稿の正確な内容が反映されない場合は、そのような PDF ファイルもお付け下さい。

(2) 『中国出土資料研究』第 29 号の締切について

2010 年度大会（2011 年 7 月 16 日開催）、2011 年度大会（2012 年 3 月 10 日開催）および 2023 年度大会（2023 年 7 月 1 日開催）にて、『中国出土資料研究』の投稿要領改定が承認されております。第 29 号の投稿締切日は、2024 年 12 月末日です。ふるってご寄稿下さいませよう、お願い申し上げます。

(3) 『中国出土資料研究』の奥付について

機関誌では、その奥付記載発行日と実際の出版日との間のずれが大きいことに由来する問題が生じておりました。そこで、第 20 号からはその日付を一致させることになりました。最新第 28 号の奥付は 2024 年 7 月発行の予定です。

○事務局より

(1) 事務局では中長期的に見て経費節減が求められること等の理由により、大会案内等紙媒体の送付停止、および学会ウェブサイトとメールでのご連絡を継続することといたしました。ご不便をお感じになる方もおられるかもしれませんが誠に恐縮ですが、どうぞご理解賜りますようお願い申し上げます。

(2) 年会費は、ゆうちょ銀行の以下の口座にご入金下さい。

口座番号：00180-5-13124 受取人：中国出土資料学会

なお会費は、 通常会員・準会員 年額 4 0 0 0 円
 学生会員・海外会員 年額 2 0 0 0 円 です。

(3) 住所変更等が生じた場合は、メールにて下記アドレス宛にご連絡下さい。

office@shutsudo.jp